

平成27年度
入学試験問題

国 語

特待生
前期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字になおして答えなさい。

(かい書ではつきりと書くこと。)

- (1) 楽しい日々がノウリにうかぶ。
- (2) 紅茶にサトウを入れて飲む。
- (3) あなたの意見をシジする。
- (4) 会場に作品をテンジする。
- (5) コクモツの生産量を調べる。
- (6) 不正があったことはシュウチの事実だ。
- (7) 光のエンシュツが美しい会場。
- (8) 通報を受け、消防車がタダちに出動する。
- (9) ケワしい山道を登る。
- (10) 駅前新しいビルがタつ。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本

文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「スロー・リーディング」とは、一冊の本にできるだけ時間をかけ、ゆっくりと読むことである。鑑賞の手間を惜しまず、その手間にこそ、読書の楽しみを見出す。そうした本の読み方だと、ひとまずは了解してもらいたい。スロー・リーディングをする読者を、私たちは、「スロー・リーダー」と呼ぶことにしよう。

一冊の本を、価値あるものにするかどうかは、読み方次第である。

たとえば、海外で見知らぬ土地を訪れることをイメージしてみよう。

出張で訪れた町を、空き時間のほんの一、二時間でザッと見て回ると、一週間滞在して、地図を片手に、丹念に歩いて回るとでは、

同じ場所に行ったといっても、その理解の深さや印象の強さ、得られた知識の量には、大きな違いがあるだろう。旅行は、行ったという事実に意味があるのではない(よくそれを自慢する人もいるが)。

行って、どれくらいその土地の魅力を堪能できたかに意味がある。

① 読書もまた同じである。ある本を速読して、つまらなかった、という感想を抱くのは、忙しい旅行者と同じかもしれない。じっくり

時間をかけて滞在した人が、「えっ、あそこにすぐくおしいレ

ストランがあったのに！ 行かなかったの？ あその景色は？ えっ、ちゃんと見てないの？」と驚き、不憫に感じるのと同じで、スロー・リーダーが楽しむことのできた本の中の様々な仕掛けや、意味深い一節、絶妙な表現などを、みんな見落としてしまっている可能性がある。速読のあとに残るのは、単に読んだという事実だけだ。スロー・リーディングとは、それゆえ、得をする読書、損をしないための読書と言い換えてもいいかもしれない。

丁寧(ていねい)に本を読むという意味では、昔から、「Ⅰ」「Ⅱ」といった言葉があるが、スロー・リーディングは、そうした読書態度を包括するものとして理解してもらえればよいだろう。

私(わたし)がこの読書法をおすすめしたいのは、私自身が、作家になる前となった後(のち)では、本の読み方が変わってきたこと、それによって本に対する理解が深まったことを実感しているからである。中学、高校時代に、単に一読者として小説を読んでいた頃には気がつかなかった様々な仕掛けや工夫に注意を払うようになってから、私は改めて、読書は面白いと感じるようになった。そして、私だけではない、実は作家の多くは、他人の本を読むときにも、やはり書き手の視点で読む、という作業を行っているのである。

推理小説が好きな人は、最後の謎解きのための「伏線」に注意しながら本を読む習慣があるだろう。年季の入った愛好家は、そうし

15

10

5

15

10

5

15

10

5

15

10

5

15

10

5

15

10

5

15

10

5

た伏線のパターンをたくさん知っているから、次第に最後まで読まずとも、結末が読めるようになってくるものである。

推理小説というジャンルに明瞭に見て取れる伏線は、実は、他のジャンルの小説にも様々な張り巡らされており、それだけでなく、

40

論文やエッセイの中にも、大抵、仕込まれているものである。一般的に、推理小説以外のジャンルでは、謎解きが読書の最終的な到達

点ではない。だから、ここでいう伏線も、必ずしも、具体的な結末に結びつくものではなく、作者が読者に訴えたいことだとか、登

場人物の繊細な感情の動きだとか、そういったプロットとは関係のないことを準備する場合がある。前の場面で、登場人物が見せたちよ

45

とした仕草が、次の場面での言動の意味を左右する、といったよう

に。こうした伏線は、見落としてしまったとしても、推理小説の謎

解きのように、小説がそこから先へは進めないということには必ず

しもならない。 A、速読の際には、しばしば見落とされて

50

しまうのである。

③ しかし、読書を今よりも楽しいものになりたいと思うなら、まずは

そうした、書き手の仕掛けや工夫を見落とさないというところか

ら始めなければならない。

作家のタイプにもよるが、 B、三島由紀夫などは、様々

55

な技巧に非常に自覚的な作家だったので、スロー・リーディングす

ると、ここまで気をつかうのか！ というほど、細かな仕掛けがい

くつも見えてくる。 C、その多くは、実はほとんどの読者

に気づかれないまま、埋蔵金のように（！）今も小説の至るところ

60

に眠っているのである。私自身も、もちろん、小説を書くときには、人に話せば笑われる

ほど、実は些細な点にまでいろいろな工夫を施している。そんな

ことは単なる自己満足じゃないかと言う人もいるかもしれない。し

65

かし、読者からの感想を読んでいると、ちゃんとそれに気がついて

くれ、その分、深く小説を理解し、楽しんでくれる人たちが必ずい

るのである。逆に、スロー・リーディングしてもらえれば、十分に

理解できるはずの事柄が読み落とされてしまっているときには、や

70

はり寂しい気持ちになる。

④ そう、書き手はみんな、自分の本をスロー・リーディングしても

らう前提で書いているのである。書店に足を運んで、日々、洪水のように押し寄せる新刊本の波に

茫然とする経験は、誰にでもあるだろう。今なら、アマゾンの広告

メールなどでも、新刊情報は絶えず手もとに届けられている。一体、

75

何を読んで、何を読まなくていいのか、さっぱり分からない。選択の可能性が増えたといっても、手に負える限度というものがある。

結果、^a評判になっていくベストセラー本でも読んでみるか、という
ようなことになる。

私たちは、数十年前に比べて、はるかに容易に、^bはるかに多くの
本を入手できるようになった。しかし、そのおかげで、私たちはか
つての人間よりも知的な生活を送っていると言うことができるだろ
うか？ どうも、そうでもなさそうである。

なぜだろうか？

グーテンベルクによって活版印刷技術が発明されるまで、書物は
当然、手書きであり、それだけに貴重品で、そもそも一般にはほと
んど流通していなかった。それでも、当時の人たちは、その少ない

情報だけを手がかりにしながら、今日にも通じるような深い思索を
行っている。^{*}カントやヘーゲルが生涯に読破した本の冊数が、今
から考えれば意外なほど少なかったからといって、^{かれ}彼らを無知で愚
かな人間だと言う人はいないだろう。

本に限らず、たとえば、音楽の世界でも同じことが言える。ジャ
ズ・ミュージシャンのマイルス・デイヴィスは、子供の頃にはレ
コードを三枚くらいしか持っていなかったらしい。音楽は、生演奏
か、ラジオで聴くしかなかったわけだが、それを言うなら、二〇世
紀以前のクラシックの音楽家たちは、バッハでも、モーツァルトで
も、彼らが生涯に聴くことができた曲の数というのは、ごくごく限

られたものであったはずだ。今のクラシック・マニアの何十分の一、
何百分の一程度だったかもしれない。

では、現代はどうだろうか？ 身近な友人が、プロのミュージシャ
ンになりたいと言い出したとする。その彼が、「だけどCDは三枚
しか持っていないません」と言ったとしたら、^⑤誰でも、「おまえ、ちよっ
とアタマ冷やせ」と言いたくなるだろう。私たちは、ともかくも、
手に入る情報を一通り揃えておかなければ、何もできないというよ
うな世界に生きている。しかし、そうした時代の文学や音楽が、そ
の分、質的に豊かになったかといえは、誰もが答えに戸惑うだろう。
かつての人間たちは、要するにみんな、スロー・リーダーであり、
スロー・リスナーだったのである。

個人的な経験からしても、中学や高校時代には、そもそもお金の
余裕がなかったから、月の初めに小遣いをもらって、欲しかった本
とCDとを買えば、財布はすぐにスカラカンになって、あとは翌
月まで、ひたすら同じ本を読み、同じCDばかりを聴いていた。し
かし、そうした頃に出会った小説や音楽は、細部まで今でもはつき
りと覚えているし、自分に非常に大きな影響を与えたものとして
特別な愛着を感じられる。

しかし、大人になって一度に二〇枚ものCDを買い、スキップし
ながらざっと聴き飛ばしてしまったようなアルバムや、必要に迫ら

れて、つい速読してしまったような本の中には、ほとんどマトモに内容も覚えていないようなものもある。これは無意味であるという以上に、なんとなく寂しいことだ。

私たちは、どうやってもかつての世界には戻れない。これは事実

120

である。そして、これからも、恐らくは今以上に大量の情報に囲まれながら生活してゆくことだろう。私たちは、そのすべてを網羅する必要はないし、すべてを網羅することは不可能である。もちろん、

いろいろなタイプの本を読むことは大切である。自分だけの趣味に固執し、今の自分を肯定してくれるような本ばかり読んでいては、

125

ますます視野を狭めていってしまうことになる。しかし、読書量は、自分に無理なく読める範囲、つまり、スロー・リーディングでできる範囲で十分であり、それ以上は無意味である。

私たちは、情報の恒常的な過剰供給社会の中で、本当に読書を

楽しむために、「X」の読書から「Y」の読書へ、網羅型の

130

読書から、選択的な読書へと発想を転換してゆかなければならない。

(平野啓一郎 『本の読み方 スロー・リーディングの実践』)

※プロット……物語のストーリーのこと。

※アマゾン……通信販売のインターネットサイトの一つ。

※カントやヘーゲル……共に哲学者の名前。

問一 —— 線①とありますが、

- (1) 「旅行」をする人、「読書」をする人、それぞれに見られる姿勢を次のようにまとめました。(A)、(B)に入る言葉をそれぞれ本文中から十字以内でぬき出して答えなさい。なお、「II」は共通する姿勢を、「↑↓」は相反する姿勢を示します。

〈旅行〉 (A) ↑↓ じっくり時間をかけて滞在する人
= =
〈読書〉 速読する人 ↑↓ (B)

- (2) 「読書」と「旅行」はどのような点で「同じ」だと筆者は述べていますか。次の文の (A) (B) (C) (D) に入る内容を本文中からぬき出して、説明を完成させなさい。

「旅行」が、(A ※三字) という事実よりも訪問先で

- (B ※二十字以内) に意味があるのと同じで、「読書」も、(C ※三字) という事実よりも (D ※三十字以内) を時間をかけて丁寧に味わうことに意味がある。

問二——線②「不憫」の意味として適当なものを次から選び、

記号で答えなさい。

ア、かわいそうに思うこと。 イ、腹を立てること。

ウ、とまどいを感じることに。 エ、あきれはてることに。

問六——線④とありますが、それでは、読み手が「スロー・リー

ディング」することには、どのような効果がありますか。そのような効果をもたらす理由と共に、四十五字以内で説明しなさい。

問三——

I

、

II

に入る言葉を次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。(順番は問いません)

ア、音読 イ、熟読 ウ、乱読

エ、精読 オ、黙読もくどく カ、多読

問七——線 a 「結果」、b 「容易」の対義語の組み合わせとし

て正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、a 理由 b 重要

イ、a 根本 b 複雑

ウ、a 起点 b 難解

エ、a 原因 b 困難

問四——

A

、

C

に入る語を次からそれぞれ選び、記号

で答えなさい。

ア、しかし イ、たとえば ウ、また エ、だから

問五——線③とありますが、「そうした、書き手の仕掛けや工夫」

とは何のことを指しますか。本文中から一語でぬき出して答えなさい。

問八 ——— 線⑤とありますが、それはなぜだと考えられますか。

次から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア、プロのミュージシャンを志望するのであれば、かつてのバッハやモーツァルトがどのような音楽を聴いていたかをもっと知るべきだから。

イ、プロのミュージシャンになるには、持っているCDの数ではなく、そのCDをどれだけしっかりと聴いたかが重要だと思っっているから。

ウ、プロのミュージシャンを志望するのであれば、多くのCDを持ち、たくさん音楽を聴いているのが当然のことだと思っっているから。

エ、プロのミュージシャンになるには、CDを数多く所有できるくらいの、ある程度の金銭の余裕がないといけないから。

問九 筆者の主張として正しいものにはA、正しくないものにはB

を、それぞれ解答らんに書き入れなさい。

ア、たくさん情報が手に入る現代の方が、人間はより高度で知的な生活を送ることができる。

イ、現代に生きる私たちは昔の人間よりも多くの情報に囲まれているが、その全てすべてを知る必要はない。

ウ、スロー・リーダーやスロー・リスナーである方が、作品を深く味わう豊かな読書、音楽鑑賞ができる。

エ、現代人は、情報を何でも一通りそろえたいという考えを捨てて、かつての世界を取りもどすべきだ。

問十 筆者の主張をふまえて、X、Yに入る語をそれぞれ漢字

一字で答えなさい。

③ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変・省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については句読点・記号も字数に数えます。

生まれて初めて、一人①でバスに乗った。

〈中略〉

バスは中洲なかすのある川に架かった橋を渡わたって、市街地に入る。西にかたむいた太陽が街ぜんたいを薄うすいオレンジ色に染めている。

次は大学病院前、大学病院前、と車内アナウンスが聞こえた。お降りの方はお手近のボタンを押おして……とつづく前に、ボタンを押した。急いで通路を前に進み、バスがまだ走っているうちに運賃箱のそばまで来た。

「停とまってから歩かないと」

運転手に強い声で言われた。「転んだらケガするし、他のひとにも迷惑めいわくだろ」——まだ若い運転手は、制帽せいぼうを目深まぶかにかぶって前をじっと見つめたまま、少年のほうには目も向けなかった。

数日後、父からバスの回数券をもらった。「十回分で十一回乗れるから、こっちのほうが得なんだ」——十一枚綴つづりが、二冊。

② 「だじょうぶだよ」父はコンビニエンスストアの弁当をレンジに入れながら、少年に笑いかけた。「これを全部使うことはないから」

「ほんと？」

「ああ……まあ、たぶん、だけど」

足し算と割り算をして、カレンダーを思い浮かべた。再来週のうちに使いきる計算になる。

「ほんとに、ほんと？」

低学年の子みたいにしつこく③（ ）を押した。父は怒おこらず、A 少し申し訳なきように「だから、たぶん、だけどな」と言った。

電子レンジが、チン、と音をたてた。

「よし、ごはんだ、ごはん。食べるぞっ」

父は最近おしゃべりになった。なにをするにも B 声をかけてくるし、ひとりごとや鼻歌も増えた。

お父とうさんも X なんだ、と少年は思う。

回数券の一冊目を使いきる頃ころには、バスにもだいぶ慣れてきた。

「毎日行かなくてもいいんだぞ」

父に言われた。「宿題もあるし、友だちとも C 遊んでない

だろ？ 忙いそがしいときや友だちと遊ぶ約束したときには、無理して行かなくてもいいんだからな」——それは病室で少年を迎むかえる母か

らの伝言でもあった。

母は自分の病気より、少年のこのほうをずっと心配していた。

自転車でお見舞いに行きたくても、交通事故が怖いからだめだと言われた。バスで通っていても、病室をひきあげるときには必ず「降りたあと、すぐに道路を渡っちゃだめよ」と釘を刺されるのだ。

「だいじょうぶだよ、べつに無理してないし」

少年が笑って応えると、父は少し困ったように「まだ先は長いぞ」とつづけた。

「昼に先生から聞いたんだけど……お母さん、もうちょっとかかりそうだって」

「……もうちょっと、って?」

「もうちょっとは、もうちょっとだよ」

「来月ぐらい?」

「それは……もうちょっと、かな」

「だから、いつ?」

父は少年から目をそらし、「医者じゃないんだから、わからないよ」と言った。

二冊目の回数券が終わった。使いはじめるとおっけない。一往復で二枚ずつ——一週間足らずで終わってしまう。

まだ母が退院できそうな様子はない。

「回数券はバスの中でも買えるんだろ。お金渡すから、自分で買うか?」

「……一冊でいい?」

④ ほんとうは訊きたくない質問だった。父も答えづらそうに少し間をおいて、「面倒だから二冊ぐらい買っとくか」と妙におどけた口調で言った。

「定期券にしなくていい?」

「なんだ、おまえ、そんなのも知ってるのか」

「そっちのほう回数券より安いんでしょ?」

定期券は一カ月、三カ月、六カ月の三種類ある。父がどれを選ぶのか、知りたくて、知りたくなくて、「定期って長いほうが得なんだよね」と言った。

「ほんと、よく知ってるんだなあ」父はまたおどけて笑い、「まあ、五年生なんだもんな」とうなずいた。

「……何カ月のにする?」

「お金のことはアレだけど……回数券、買っとけ」

父はそう答えたあと、「やっぱ三冊ぐらい買っとくか」と付け加えた。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそっと覗き込んだ。あのひとだ、とわかると、胸がすばまった。

初めてバスに一人で乗った日に叱しかられた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

⑤ 嫌いやだなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大学病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「いくらのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつかえてるだろ」とぶっきらぼうに言って、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちよっと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇わきにどくよう顎あごを振ふった。

少年は頬ほおを赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互こうごに呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴うたえた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探さがり、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよってるの？」と、さっきよりさらにぶっきらぼうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」

わかってる、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かぼそい声で応え、そのまま、逃にげるようにステップを下りて外に出た。全然とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中^{とちゆう}で橋から眺める街は、炎^{ほのお}が燃えたつような色から、もっと暗い赤に変わった。帰りは夜になる。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあとにも病室で父を待つ日もあった。

それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から二枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。

⑦ 明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。

ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っていると、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れはじめた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら泣きじゃくった。

『本町一丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウィンドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたと

き、とうとう泣き声が出ってしまった。

「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの？」——ぶつきらぼうではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまった。

「財布、落としちゃったのか？」

泣きながらかぶりを振って、回数券を見せた。

じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。

河野さんは「どうした？」ともう一度訊いた。

その声にすうっと手を引かれるように、少年は嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買うと、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。

河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かずに、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客様が待ってるんだから、早く」——声はまた、ぶつきらぼうになっていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか

「回数券まだあるのか？」と父に訊かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかった。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさって退院だぞ」

退院の日、母は看護師さんから花束をもらった。車で少年と一緒に迎えに来た父も、「どうせ家に帰るのに」と母に笑われながら、大きな花束をプレゼントした。

帰り道、^⑧「ぼく、バスで帰っていい？」と訊くと、両親はきよんとした顔になったが、「病院からバスに乗るのもこれで最後だもんなあ」「よくがんばったよね、寂しかったでしょ？　ありがとう」と笑って許してくれた。

^⑨「帰り、ひよっとしたら、ちよっと遅くなるかもしれないけど、いい？　いいでしょ？　ね、いいでしょ？」

両手で拜んで頼むと、母は「晩ごはんまでには帰ってきなさいよ」とうなずき、父は「そうだぞ、今夜はお寿司とるからな、パーティーだぞ」と笑った。

(重松清『小学五年生』より「バスに乗って」)

※鳴咽……声をつまらせて泣くこと。

問一 —— 線①とありますが、何のために少年は、「一人でバスに乗った」のですか。二十字以内で答えなさい。

問二 —— 線②とありますが、ここではどのようなことを心配して、「だいじょうぶだよ」と言っているのですか。十五字以内で説明しなさい。

問三 —— 線③の（ ）に入る漢字一字を答えなさい。

問四 A C にはあてはまる言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、全然 イ、やっと ウ、かえって エ、いちいち

問五 X には、「お父さん」の心情を表す言葉が入ります。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、腹立たしい イ、うれしい
ウ、寂しい エ、せわしない

問六 —— 線④からは、「少年」も「お父さん」も回数券について、触れたくないようすがうかがえますが、それは二人にとって、回数券の冊数が、何を意味するからですか。簡潔に答えなさい。

問七 —— 線⑤とありますが、このとき少年はなぜ「運が悪い」と思ったのですか。その理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、回数券を買うことに決めていたのに、運転手に後回しにされたあげく、定期券を買うようすすめられたから。

イ、回数券を買おうと思って乗ったバスの運転手が、以前しかられたことがある人で、怖いとっていたから。

ウ、回数券を買わなければならないのに、以前自分をしかつたことのある運転手は、面倒くさがって、売ってくれそうにないから。

エ、バスに乗るとなぜかいつも運転手は不機嫌な人ばかりで、ただでさえ緊張きんちやうするのによけいに気持ちが悪くなるから。

問八 ——— 線⑥とありますが、何を「とんちんかん」だというの

ですか。それを説明した次の文の空らんに入る言葉の組み合わせとして正しいものを後から選び、答えなさい。

河野さんは少年に を聞いたのに、少年は

を答えてしまったこと。

- ア、1 どれくらいバスに乗るか — 2 何のためにバスに乗るか
イ、1 何のためにバスに乗るか — 2 どれくらいバスに乗るか
ウ、1 なぜバスに乗るか — 2 いつバスに乗るか
エ、1 いつバスに乗るか — 2 なぜバスに乗るか

問九 ★ の部分の表現は本文中において、どのような効果があり

ますか。次から一つ選び記号で答えなさい。

ア、夕暮れの街の寂しげな様子から、少年の気持ちの落ち込みを描いている。

イ、明々と燃える夕日によって、少年が抱いている情熱の強さを示している。

ウ、早く暗くなる街の風景に、一人でバスに乗る少年の恐怖心を表している。

エ、日没の時間の变化から、バスで通い始めてからの時間的経過を示している。

問十 ——— 線⑦とありますが、まだ一枚回数券が残っているのに、

それを使わず、「お小遣いでバスに乗ることにした」のはなぜですか。解答らんにあうように五十字以内で答えなさい。

問十一 ——— 線⑧、⑨とありますが、なぜ少年はこのように言った

のですか。二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

